全国裁判長選任鑑定人

この記事を書いた記者は「全国裁判長選任鑑定人」などというものが存在しないことすら気がつきませんでした。その後この記者は、なんとかしようと走り回る。そのため、また多くの人を迷わす記事を出してしまった。

新聞記事 1995 年 11 月 11 日 00:00:00　共Ｔ５５２社会０３５
◎「祐三の絵に私が加筆」　　故佐伯夫人の書簡発見
支援者に遺作の譲渡懇願　　作家像の見直しも　（本記）

日本を代表する洋画家として大正から昭和初期にかけてパリを中心に活躍した故佐伯祐三の妻で洋画家の故米子夫人が、かなりの数の佐伯作品を加筆して仕上げていた事実を自ら告白している書簡が十一日、共同通信社が入手した佐伯に関する資料から見つかった。書簡は、生前の佐伯を物心両面で支援していた精神カウンセラー、故吉薗周蔵氏あて。仕上げの手法を明示し、加筆すれば「売れる画」になるとして、吉薗氏に手元にある佐伯の遺作を譲渡するよう懇願している。夫人自ら加筆の事実を告白した資料が明らかになったのは初めて。内容が事実とすれば”夭折（ようせつ）の天才画家”佐伯の作品研究の見直しを迫ることになりそうだ。見つかった米子夫人の吉薗氏あて書簡は全部で十一通。和紙やノートの切れ端に、鉛筆や筆で書かれている。岩手県遠野市に住む吉薗氏の長女明子さん（５１）が所有している。米子夫人が加筆を明かした書簡は縦十八センチ、横十四センチの和紙二枚に鉛筆でびっしり書き込まれているが、日付は入っていない。全国裁判長選任鑑定人が筆跡鑑定。米子夫人が佐伯の友人の洋画家、故荻須高徳にあてた昭和六年三月二十五日付の書簡と比較した結果、同じ米子夫人の筆跡と判明した。

この記事に関して、落合氏の天才画家「佐伯祐三」真贋事件の真実　p 161 に下記のように記されています。

折から共同通信社の記者が、別件で落合事務所に来た。明子の依頼により、私は米子書簡の幾つかと、祐三が画用紙の裏に文章を書き込んだ「郵便配達夫」のスケッチを託して、自分に代わって筆跡の鑑定に行ってもらった。多忙を口にする鑑定人も、マスコミ記者を優先するとみえ、大至急で鑑定作業に入ってくれることになった。

鑑定の材料は全て明子氏由来のものである。明子氏がどうやって、「本物の米子の真筆」を手に入れることができたのであろうか？山田や荻須あての手紙をどうやって手に入れることができたのであろうか？市の鑑定ではコピー、吉園側では真筆での鑑定となっている。明子氏はコピーを実筆に変える魔法でも使ったのだろうか？

落合氏の天才画家「佐伯祐三」真贋事件の真実の問題点は明子氏の書「自由と画布」。明子氏の父周蔵が残したとされたものをまとめた「佐伯祐三の巴里日記」は、あてにならないと断定していることである。「自由と画布」は他で記すが伝聞でもないし人に言われて書いたものではない。「巴里日記」もあてにならないと書いているが、最近のＨＰでは裁判で「巴里日記」を取り上げてくれなかったと前言を翻している。「巴里日記」については他で述べるが、狭いパリの部屋で佐伯はいつ米子の眼を盗んで書いたのだろう。日記とはパリに来た感動とかその日の出来事をかくものだと思う。ところが、この日記は周蔵との交流があったことを印象づけるためのみに書かれたように見える。

救命院日誌については矛盾があっても、佐伯が何度も書き直させたので仕方がない。なぜ佐伯がそうさせたかはわからない。日にちの間違いや事実と違うことがあっても、それは佐伯が書き直させたからだという、どこへでも逃げられる話になっている。薩摩千恵子のラブレターについても、なぜ周蔵のところにあるかわからない。つまりすべて逃げ道が作ってある。落合氏の本を読み返して驚いたのは、「パリで描いた祐三の絵は薩摩千代子が吉園家に送ってきた。周蔵はそれらの作品を、藤根を通して外山卯三朗に預けた。」。外山も草としてしまっているのである。

こうなってくると、故人となってしまった人の尊厳はどうなるのであろう。どこにもそんな証拠はない。なぜ画家が佐伯にしても、藤田嗣治にしても草にならなければならないのか。こうなってくると嘘を承知で書く確信犯である。それか、吉園明子側に完全に洗脳されたロボットなのかもしれない。